

## 私の映画史

### 映画監督田中徳三さんのこと

衣斐弘行

文芸評論家

映画監督田中徳三さんにはじめて会ったのは1995年(平成7年)2月大阪でのことであった。それは昭和末年ごろから三重大学にいてその後大阪樟蔭女子大学へ移られた武田雅子先生が主催する会のことだった。武田さんはアメリカの詩人エミリ・ディキンソンの研究家で知られた人だが市川雷蔵の大的ファンでもあった。私は学生時代知人の紹介で大秦の撮影所でアルバイトをしたことがありそのとき雷蔵主演で確か井上昭監督の『陸軍中野学校 密命』に端役で駆り出されたことがあった。普通はエキストラの人が出るはずなのに撮影が遅れ夜になり人がいなくて急に頼まれた。場面は大映京都撮影所の玄関先を中国の場末にセットし支那服を着せられ市川雷蔵がマーチョから下りるのを野際陽子だったか高田美和だったかが迎えその傍をアベックの男女が通る、というシーン。そのアベックの男の役を頼まれた。そんな話を以前雷蔵ファンの武田さんにしたことがあり、そんなことから会に誘いを受けた。

武田さんが大阪勤務になってから北浜中之島近くで毎月催していた会は「ユタ文学ポシエット」といい会費制で二、三十人前後の人が集まっていた。淀川を背にしたこのビルは嘗て大阪

の老舗料亭で木戸孝允命名の「花外楼」として明治八年の例の伊藤、大久保、板垣らとの大阪会議の料亭としても知られたところ。行ってみて一月の神戸淡路大震災の被害の影響がこの辺りは感じられないので不思議な思いだった。武田さんはこの旧花外楼のビル主と知縁があったようだ。前年(平成六年)が市川雷蔵没後二十五年であったのでそのときの会は「市川雷蔵没後二十五年にあたって」映画と文芸」とあり講師に田中徳三監督を招いての会であった。田中監督のそのときの話は田中さんが助監督時代雷蔵の第一回主演作品『花の白虎隊』や市川崑監督の『炎上』から溝口健二監督の『新平家物語』、自身が監督した『眠狂四郎』『忍



田中徳三監督

筆者

びの者』、それに勝新太郎の『悪名』『座頭市物語』等に関する話と若くして逝った雷蔵との思い出であった。そして話の合い間に武田さんの知人女性が今東光原作「悪名」の一節を朗読やティータイムという構成だった。

静かで控えめに語られる田中さんの話はとても魅力的で、なかでも助監督時代の話はその人柄が感じられた。例えば次のような話が面白かった。助監督というのはよろず文句引き受け業のようなもので監督と俳優とのお互いからの苦情を聞き、使い走りをする。殊に俳優部の大部屋にはこの道十年のモサ連中がいて田中さんは態度が悪いと連中に取り囲まれ幾度か殴られそうになった。しかし、この大部屋のモサ連中が監督になったときに一番喜んで祝ってくれたという。話を聞きながらアルバイト当時大部屋のマッサンと呼ばれていた女優さんが私に話したことを思い出した。マッサンは大部屋連中から慕われる監督や俳優は大物だがそんな人は稀だ、といった。田中さんは十二年間余の助監督時代を経て苦労の末に監督になられたそうだがそんなことを微塵も感じさせない人であった。

会の後、前年六月に出版された綾羽一紀編による「映画が幸福だった頃〜田中徳三映画術」という本を戴いた。帰途車中で本に目を通すとなんと田中監督も私が端役に駆り出さ

れた雷蔵主演のシリーズ『陸軍中野学校 竜三号指令』というのを撮っていたことを知り驚いた。

この会で田中監督にお会いしてから更に五年後の2000年(平成十二年)十一月に「伊賀忍者映画上映会」なるものが催され上映前後に田中監督の講演があることを知った。会は伊賀忍者事業実行委員会主催で市川雷蔵ファンクラブの朗雷会協賛であった。私は日程の都合をつけて是非もう一度田中監督の話を知りたいと願った。会場である上野市産業会館へ行くと聴衆は少なく閑散としていて講師の田中監督に気のどくな思いがした。田中監督の『忍びの者』は現在の伊賀忍者ブームの火付けの一翼を担われた作品であったろうし、その時の話は撮影の裏話など貴重な内容であっただけに勿体なかったな、という思いが今もしている。講演後会場に来ておられた藤田明先生と控室に田中監督を訪ねるとそこにも監督以外誰も居なく却って三人で暫く映画談義をすることができたのは幸いであった。(写真はその際監督との一枚)

「映画が幸福だった時代」を生きてこられた田中徳三監督が亡くなられて今年が正当十三回忌でもあり、この機に思い出を少し綴ってみた。